有島武郎著作集第十一輯『惜みなく愛は奪ふ』を読む（三）

―本文分析を中心にして（2）―

宮野光男

本論は、先に公にした「有島武郎著作集第十一輯『惜みなく愛は奪ふ』を読む（一）―エピグラフ解釈・自註分析を中心に―」〔「日本文学研究」第二十三号　昭62・11〕、「有島武郎著作集第十一輯『惜みなく愛は奪ふ』を読む（二）―本文分析を中心にして（1）」〔同二十四号　昭63・11〕〔以下（一）、（二）と称する〕に続くものであり、（二）において主として十四章までの分析を通して明らかにした有島の個性復帰願望の実現の可能性について、十五章以下に展開されている〈愛〉の論理を分析することによって考察することを目的とするものである。

一

有島武郎の〈愛〉の考察を始めるにあたって、十五章において述べられている有島の愛に関する認識の基本的構図を確認しておこう。

まず、有島によれば、〈人間には人間が大自然から分与された本能があ〉り、〈愛は人間に現はれた純粋な本能の働きである〉ということ、次に、〈愛は与へる本能である代りに奪ふ本能であり、放射するエネルギーである代りに吸引するエネルギーである〉というものであった。

また、一般的には否定的に用いられている〈利己主義〉という言葉と、肯定的に用いられている〈利他主義〉という言葉の正確な概念規定を試み、そのことを通して、〈利と愛との両語が自明的に示すが如く、利は行為或は結果を現はす言葉で、愛は動機或は原因を現はす言葉である〉ことを明らかにし、さらに、

人は愛の作用を見て直ちにその本質を揣摩し、これに対して本質にのみ名づくべき名称を与へてゐるのではないか、又人は愛が他に働く動向を愛他主義と呼び、己れに働く動向を利己主義と呼ぶならはしを持つてゐる。これも偶々人が一種の先入僻見を以つて愛の働き方を見てゐる証拠にはならないだらうか。二つの言葉の中、物質的な連想の付帯する言葉を己れへの場合に用ゐ、精神的な連想を起す言葉を他への場合に用ゐてゐるのは、恐らく愛が他を益する時その作用を完うし得るといふ既定の観念に制せられてゐるのを現はしてゐるやうだ。

と言い、〈愛の本質と現象との混淆〉を避けなくてはならないものであることを述べるとともに、〈愛他主義〉という表現に見られる誤られた愛認識—本質に於て与えるものだという—への警告がなされていることも、有島の愛論考察の一つのポイントであることを示しているのである。

有島の思いの中では、愛の問題は、あくまでも〈動機或は原因を現はす言葉〉として位置づけられているものであるとともに、いかにしてそれが有島の生活において可能であるのかを、そしてまた機能しうるものであるのかを述べることにその主眼点が置かれているのであるが、以下十六章から二十九章まで、重点的に有島の述べる愛認識の諸相を明らかにしながら、エピグラフ詩との関連においてそれらの問題を考察してみたいと思う。

二

十六章は、〈愛の表現は惜みなく与へるだらろう。しかし愛の本体は惜みなく奪ふものだ〉という有島の、愛に関する基本的な主張がなされているところであるが、その前提としての自己確立が問題にされている章である。

愛の実行が可能になる条件として、有島は、

私が愛すべき己れの存在を見失つた時、どうして他との交渉を持ちえよう。

と言う。つまり、愛の可能性は、自己発見が前提となるというのである。もち論、この場合の〈己れの存在〉とは、個性復帰を遂げることのできた自己であるか、少なくともその可能性をもった存在であることは言うまでもないことである。

私の愛は私の中にあつて最上の生長と完成とを欲する。私の愛は私自身の外に他の対象を求めはしない。私の個性はかくして生長と完成との道程に急ぐ。然らば私はどうしてその生長と完成とを成就するか。それは奪ふことによつてゞある。愛の表現は惜みなく与へるだらう。然し愛の本体は惜みなく奪ふものだ。

つまり、有島のいう愛の可能性は、自己拡充と自己充実とをその内容とするところの〈愛己主義〉に見出されるというのである。

このところで有島は、〈愛は本能である〉がゆえに、〈知的生活に於ける欲求の一形式にしか過ぎない〉〈自己保存〉だけに中心点を置いた〈愛己的本能〉で満足することができないと考えているのは当然のことなのであるが、愛の根拠としての自己充実を自己の内部に確立することが、愛成立の第一の条件として位置づけられているとする有島のこの考え方は、明らかにホイットマン詩〈I exist as I am〉をひとつの依り拠としているということができるところであろう。

つまり、愛が自己認識における絶対的肯定性をその根拠としているということは、たとえば聖書の〈己のごとく汝の隣を愛すべし〉(註1)が、とかく後半の部分に力点が置かれるあまり、〈己のごとく〉が

等閑視されてしまう現実に対して、〈己のごとく〉と表現することによって、人間の愛希求のリアリティが端的に表現されることと論理的には等質の発想であるにちがいない。

ところで、この章で有島は、〈奪ふ愛〉の表現として〈同化〉という概念を用いているのは興味深いことである。

私の個性は絶えず外界を愛で同化することによってのみ生長し完成してゆく。〔中略〕私がその小鳥を愛すれば愛する程、小鳥はより多く私に摂取されて、私の生活と不可避的に同化してしまふのだ。

このところで、有島は、〈I live a bird〉という考え方で同化の説明を試みているのであるが、それが小鳥と人間との、論理を越えた一体感を内容としているという意味で、汎神論的自然観がその背景にあることを指摘することは容易なことであろう。あるいはまた、自他合一の無媒介的可能性を信じる世界だという意味で、神秘主義的傾向を見ることができるところでもある。

〈同化〉という言葉に注目した山田昭夫氏の、〈外界の人や物を愛というふしぎな作用で自己の中に摂取し、心情を豊かにして個性を充実させること〉という註[註2]があるように、それは、自己拡充と自己充実とを目指す行為であり、有島のいう〈同化〉とは、〈若し私が愛するものを凡て奪ひ取り、愛せられるものが私を凡て奪ひ取るに至れば、その時に二人は一人だ。そこにはもう奪ふべき何物もなく、奪はれるべき何物もない。〉〔十八〕という意味で、それは、生物学的同化論ではなく、全人格的同化論であることを示しているのである。

この論理が人間関係論における一種の極限的状況を現していると同時に、自己の内面性・存在性の変化を言い表しているということができるのではないだろうか。なぜならば、このところで、たとえば「或る女」の葉子の〈一体化願望〉[註3]を想起することができるのであるが、それは人間関係論ではなく、対象を自己の内側に取り込み摂取しつくしてしまおうという思いの提示だというべきものであったことを想起することができるところなのである。

有島の愛の論理が、エゴイズム〔エロース〕のそれであるという批判も、このところに言われるのであるが[註4]、（一）、（二）において指摘したように、有島の愛論が関係概念としての愛論ではないと思われることからして、そのことはむしろ当然のことでもあろう。このように、激しい同化志向を見ることができるということは、自己の内面における欠落感と孤独感とが、有島の内面の基調であったことを物語っていることにもなるのである。

*

十七章において有島は、愛がたとえ〈片務的〉働きであり、〈相互的に通ひ合はなかつた〉としても、〈不可避的に何等かの意味の獲得〉であり、そのところに愛の本質を見ることができるというのである。この有島の論理は、〈愛は動機或は原因を現はす言葉である〉〔十五〕とする考えかたの当然の帰結であろう。

愛が動機であるということは、神がいっさいの存在の第一原因で

あるという神学的命題に類似した概念であって、このところにも有島の愛に対する絶対的位置づけの傾向、あえて言えば有島の愛の論理が、神と容易に入れ替わることのできるものであるという特色を見ることができるところであるが、ということは、対象からの応答の有無が、愛の存立とは本質において無関係であることが、その特色であることを意味していることにもなるのである。

愛が関係概念ではなく、〈動機〉であり、〈原因〉であるからには、相手に対する影響は、二義的なものなのである。したがって、たとえ愛の働きが〈他が私と何等かの点で交渉を持つにあらざれば、私は他を愛することはできない〉〔十六〕ものであるにもかかわらず、〈愛は自己への獲得であり、〈惜みなく奪ふもの〉だと言えるのであろう。さらに言えば、〈愛せられるものは奪はれてはゐるが、不思議なことには何物も奪はれてはゐない〉ということにもなるのである。

有島の愛論が、〈片務的〉働きであることを肯定しているのもそのためなのである。それにしても関係の中に位置づけられない愛の営みが、寂しい孤独な様相を帯びてくるものであることは否めない。だからこそ、愛の関係成立が、あらまほしき状況として〈若し愛が相互的に働く場合には、私達は争つて互に互を奪ひ合ふ。〔中略〕その結果、私達は互に何物をも失ふことがなく互に獲得する。人が通常いふ愛するものは二倍の恵みを得るとはこれをいふのだ〉と、熱っぽく語られているのもそのためであるにちがいない。

愛の働きが、奪うという表現によって言い表されていることは、それが、結果として自己内部の変化をもたらすものとして期待されているということでもあるが、有島はホイットマンの詩を借りて、自己内部における変化のひとつの表現が、創造の可能性であることを、次のように述べている。

ホイットマンも嘗てその可憐な即興詩の中に「自分は嘗て愛した。その愛は酬ひられなかつた。私の愛は無益に終つたらうか。否。私はそれによつて詩を生んだ」と歌つてゐる。

ここで取り上げられているホイットマン詩は、このエッセイの二編のエピグラフのうちのひとつ、〈Sometimes with one I love〉のことである。

〈詩を生んだ〉、という意味で、それは有島の、詩人性獲得の可能性のへの共感の表明であり、愛する人間の側に生じた内面的変化、それに付随して生じた創作意欲、その結果としての作品の誕生という一連の内的経験とその発現を、いかに〈獲得〉と言い、〈奪ひ合ひ〉だと言ってみても、それは所詮内面に生じた変化の謂であろう。

芸術作品を生み出す行為というものが、元来、本質的にそうであることは宿命的なことにちがいないが、ダンテが〈愛の獲得の飽満さを自分一人では抱へきれずに、「新生」として「神曲」として心外に吐き出した〉のだとしても、そしてそれが、〈飽満からの余剰にいかに多くの価値を置く〉ことができたとしても、本来、関係概念であるはずの愛の働きを考えることからすれば、あまりにも寂し

い孤独の営みということになる。

有島は「惜みなく愛は奪ふ」自註において再三、このホイットマン詩を掲げて、〈奪ふ〉という概念が、内面に生じた創作意欲とその成果をもたらすものであることを述べていることについては、（一）において指摘したことであるが、有島の愛論は、〈動機〉、や〈原因〉、つまり他者に対する一方的な関心であるという意味で芸術論として位置づけるものであつて、人格的関係性の側面はあえて第二義的名ものとされているのではないかと思わるのもそのためである。その意味ではこの章の冒頭部分における〈目を挙げて見るもの、それは凡てが神秘である〉という有島の述懐は、愛の論理が孤独の論理であることをまたしても言い表しているところであるように思われるのであるし、有島の、発想における神秘主義的傾向は、愛に関する自己認識に見られるあらゆる否定性を非論理的に肯定へと転換せしめるためには有効性をもっているのではないかと思われるという意味で、たいへん興味深い発想だということができよう。なぜならば、個性復帰が、自己充実、自己完成性志向をその内容としていたことについては、すでに述べてきたとこであるが、このところでもうひとつ、個性〔神秘的他者としての〕との関係回復によってもたらされるものへの期待が、その背後にあって支えている論理であると考えることができるのではないかと思われるからである。

神秘の世界、それは他の存在を許さない孤独の世界である。通常のあり様のなかで生きている人間にとっては、通常の世界でしかありえないものであっても、神秘の世界に存在する者にとっては、他者の同情と共感とを求めることのできない個人的な体験に対する個人的な反応だけが意味をもちうる世界であり、有島があえて〈現実的な、散文的な私にも、愛の働きのみは近づきがたき神秘な現はれとして感ぜられる〉とする世界なのである。

有島の自然観、運命観が、超越的な存在をそのなかに認めていると言う意味で、本質的には神秘主義的傾向をもったものであることについては既に指摘したことである。(註5) それは、〈理外の理〉を信じざるを得ない有島であることを、換言すれば、〈物質の法則を超越したこの神秘は私を存分に驚かせ感傷的にさへする〉ものであり、〈愛といふ世界〉、それは〈魔術〉的ですらあると感じさせるものであるが、愛が、このように、たんなる強調表現としての〈神秘〉ではなく、それの実質的な神秘性が語られているということは、有島の愛考察のもうひとつのポイントになるところではないかと思われるのである。

神秘主義について清水安治氏は、その著『ホヰットマン新研究』〔昭和十二年十一月　東京堂〕において、ジョン・バッカムやキャノン・イングの説を引きながら次のように述べている。

神秘主義は神格と人格との合一、換言すれば神と共に在る自我を発見せんとする宗教的哲学的欲求である。

さらに両者の説を総合して、

実に神秘主義の特色は「神を愛する事」「人間を愛する事」そして遂に人間の現実生活を愛する事であらねばならない。其れは人生を全的に把握せんとする人間の本能的欲求であり、人生に対して漠然たる消極的態度をとるどころか、却つて最も積極的に生きようとするものである。かゝる神秘主義思想こそ人類の文化生活の発展の重大なる内的原動力となるのである。

と言う。

その背景には、〈哲学思想としてはカントから出発してエマーソンに至つた超絶主義（Transcendentalism）がそれであり、宗教思想としては十七世紀イギリスに勃興したクエーカーリズム（Quakerism）などがそれであつた〉と言うのであるが、このふたつの流れは、直接的に有島の体験としてその精神史のなかに痕跡をとどめていたということができるものであり、間接的にはホイットマンを通して体験することができたこととしてよく知られていることでもあることは周知のことである。[註6]

氏はさらにホイットマンの東洋思想の影響をその背景とする〈霊魂不滅説〉や、〈自我の絶対的尊重が即ち其の全的表現であるところの個性尊重、個人の尊重〉が、神秘主義的傾向を伴いつつ有島のなかに流入していることを指摘しているが、これも示唆に富んだ意見である。とくに、ホイットマンの〈disciple〉であり、またその影響下にあると思われるカーペンターとの関係を積極的に評価し位置づけているのは興味深いことである。

ところで、有島の精神構造にみられる神秘主義的傾向は、キリスト教的神秘主義の影響だけではなく、プラトニズムとの関係についても思いを致しておく必要があるのではないだろうか。

〈プラトニズムの枠組みでは、魂の神探求は、当然のことながら神への帰還・神への上昇として捉えられる。魂は本来神と共に在るはずのものであるから、神に向かって上昇して行く時に魂が自覚するのは自らの真の本性にほかならないからである〉[註7]と言われているが、有島の魂論が、〈魂の神への上昇〉を容易に是認する傾向をもったものであることは、〈お前の神と称してゐたものは、畢竟するに極く幽かな私の影に過ぎな〉い〔六〕という個性であり、〈魂〉の別称であることからも明かなところだからである。

＊

十八章で問題になっているのは、愛の働きの本質であるところの〈烈しさ〉である。

愛がその飽くことのなき掠奪の手を拡げる烈しさは、習慣的に、なまやさしいものとのみ愛を考へ馴れてゐる人の想像し得るところではない。

というように、それが物理的な意味ではないことは言うまでもないことである。

それは一面において個性の強烈さの表現であり、〈時間と空間をさへ撥無するほどの拡がりを持つた或る世界〉の表現でもある。〈或る世界〉とは、実現した個性の世界の謂いでもある。そして

〈時間と空間をさへ撥無するほどの拡がりを持つた或る世界〉とは、すなわち神秘の世界のことでもあるが、それは因果律の成り立たない世界、——明在系に対して暗在系の世界、つまり〈向こう側の世界〉[註8]を求めることの切実さを表現しているところの烈しさなのである。もち論、その烈しさは〈肉体の破滅を伴ふまで生長し自由になつた個性の拡充〉の表現でもあり、〈愛したが故に死なねばならぬ〉ことをその本質のなかに潜めている烈しさでもある。したがって、〈愛したものゝ死ほど心安い潔い死はない〉というところに愛の完成の姿を見ようとする有島にとって、この章に取り上げられている十字架上のキリストの愛は、まさに格好の例示なのである。

＊

十九章では、〈人間の愛の変じた一つの形式である〉〈憎み〉が語られている。

憎しみは愛の対立概念として考えられているのが一般的である[註9]が、有島の場合、そうではないようである。

愛と憎みとは、相反馳する心的作用の両極を意味するものではない。憎みとは人間の愛の変じた一つの形式である。愛の反対は憎みではない。愛の反対は愛しないことだ。

したがって、〈憎む場合にも私は奪ひ取る〉という論理が成立するというのである。このところでも憎しみが、関心という言葉で置き換えられる概念として用いられていることは明かであるが、ただし、その結果は悲惨である。なぜならば、愛の場合と同様に、〈憎しみの場合に於ても、例へば私が私を陥れたものを憎んで、これに罵詈を加へたとすれば、憎まれた人も、その醜い私の罵詈も共に還つて来て私の衷に巣喰ふのだ。それは愛によつての獲得と同じやうに永く私の衷にあつて消え去ることがない〉からである。だから、憎しみによって得たものは、有島によって〈愛の鬼子〉と呼ばれているのである。

しかし、〈憎まない〉ということが有島にとっては不可能かといえばそうではない。人間にとって完全に憎しみを払拭してしまうことは、あるいは不可能であるかもわからないが、まず〈少くとも、憎悪の対象を減ずることは出来る〉のだし、〈愛と憎みとが若し同じ本能から生れたものであるとすれば、それは必ず成就さるべきもの〉なのである。

それは、視角の変化によっても可能となることでもあるという。そして、〈或る視角から憎むべきものならば、他の視角から必ず愛すべきものであることに私達は気付く〉のであり、その意味では〈愛へはもう一歩〉だというのである。

このところにも、有島の愛の枠づけが、関係の希求願望ではあっても、関係概念ではなく、むしろその〈原因〉、あるいは〈動機〉であるとする有島の思いがよく表れているところである。

この章にはもうひとつ、興味深い問題が提示されている。それは〈犠牲〉、〈献身〉の問題である。

第三者にはたとひ私の生活が犠牲と見え、献身と見えようとも、

私自身に取つては、それが獲得であり生長であるのを感じた時、その時、私が徹底した人生の肯定者ならざる何人であり得よう。

犠牲も獲得であるという考え方は、〈奪ふ愛〉論理を提唱している有島にとっては当然のものであろう。「或る女」の葉子が、定子を犠牲にして、倉地の愛を獲得しようとする発想の根拠を、このところに見ることができるのであるが、その意味で、葉子の定子犠牲の決断が、アブラハムのイサク供犠とは、根本的に異なっていると言わなくてはならないのである。(註10)

＊

二十章は、これまでに述べられてきた愛に関する有島の論理が、確認のかたちでアフォリズム風に記されているところである。

なかでも、〈ダ井ィンチは、「知ることが愛することだ」といつた。愛することが知ることだ〉という主張は、愛が〈動機〉であり、〈原因〉であることを端的に表現したものとして興味深いところである。また、

芸術は愛の可及的純粋な表現である。

は、芸術と愛との関係についての新しい問題提起であり、二十一章の内容に対して序詞になっているところである。

＊

二十一章は〈愛を出発点として芸術を考へて見る〉章である。

凡ての思想凡ての行為は表象である。／表象とは愛が己れ自ら表現するための煩悶である。その反悶の結果が即ち創造である。芸術は創造だ。

というように、有島にとっては、本能的生活者は、その本質において〈芸術家〉であるという立場に立っての愛論であり、本能的生活論であるが、以下、その具体的な表現論であるところの表象論が展開しているところである。

この章では二つの点が問題になっている。

まず第一に芸術の担い手の本質が小児性にあるという主張である。

小児—彼は何といふ驚くべき芸術家だらう。かれの心には習慣の痂が固着してゐない。その心は痛々しい程にむき出しで鋭敏だ。私達は物を見る処に物に捕はれる。彼は物を見る処に物を捕へる。物そのものゝ本質に於てこれを捕へる。而して叡智の始めなる神々しい驚異の念にひたる。そこには何等の先入的僻見がない。これこそは純真な芸術的態度だ。愛はかくの如き階級を経て最も明かに自己を表現する。

有島における小児性の問題は、すでに十二章において述べられていたことであるが、山田昭夫氏の指摘にあるように、(註11)このところには確かに〈ニイチェの『ツァラトゥストラ』第一部第一章における

人間の実存的転身の三段階、ラクダ→獅子→小児の考え方と表面的類似があり、背後の遠景としてニィチェの小児像を透かし見してよいと思われる〉ところである。

もち論、ここで言われている小児性とは、あくまでも象徴的な表現であり、現実的にはいかなる担い手が考えられているかということが問われるところであるが、この問題に対して、有島は、次のように答えている。

もつと愛の純粋な表現を可能ならしめようとする人がある。さうしないではゐられない人がある。〔中略〕それらの人々の生活はそのまゝよき芸術だ。

有島は、〈愛の純粋なる表現を更に切実に要求する人は、地上の職業にまで狭い制限を加へて思想家若しくは普通意味せられるところの芸術家とならずにはゐられないだらう〉と言う。そして、芸術家のなかにあって、〈一つの言葉にも或る特殊な意味を盛り、雑多な意味を除去することなしには用ゐることを肯んじない〉のが〈詩人〉だというのである。つまり、有島にとって愛の表象を最も効果的に実現することのできる芸術家が詩人だというのである。

たとえ、それが報いられない愛であっても、確実に奪うことのできる愛であることを、もっとも端的に実現してみせることのできるのが詩人であるということを表しているのが、ホイットマン詩、〈Sometimes with one I love〉であることは、有島のこの詩に対する自註をはじめとして、繰り返し言及していることをも含めてすでに㈠において述べたところである。

もち論、表現の可能性としては、有島にとって自分の能力を度外視して考えるならば、それは音楽であり、美術であったことはよく知られているところであるが、[註12] 有島にとっては、それが音楽であれ、美術であれ、芸術が人間の持つことのできる〈愛の自己表現の〉〈満足すべき有らゆる手段〉のなかの、より有効ものであるということができるものであり、なかでも詩に対する期待は大きかったのである。

＊

二十二章は二十一章に続いて愛の論理の社会生活における応用編である。

ここでは、話題としては、肉欲衝動、社会主義、無政府主義、宗教、教育の問題が取り上げられている。

〈社会生活は個人生活の延長であらねばならぬ〉という有島の発言からも明らかなように、愛を基本とする本能的生活が確立することが、現実世界の基本であることを述べているところである。

このところでもまた〈本能的生活〉、〈奪う〉という言葉が〈全体的な而して内部的な個性の要求〉であり、低次元のものと誤解されないような配慮がなされている。

本能的生活が、ローファー性をその本質としていることからも当然のことではあるが、主義というものが智的生活の産物であることから批判的に位置づけられているのは当然のことであろう。そのことは、〈社会生活の一つの様式として考へ得られる〉〈宗教〉問題、〈個性の権威を〉顧み、〈美しく磨き上げられ〉るべき個性尊重を

中心課題としている〈教育問題〉にしても同様だと有島は言うのである。

＊

二十三章は、〈愛を出発点〉とした本能的生活が、男と女の関係—恋愛、結婚、家庭生活—のあるべき姿を可能にすることを述べたところである。

もち論、〈個性の全的要求によつてのみ、人は愛人を見出すことに誤謬なきことが出来る〉のであるし、〈愛に対する本能の覚醒なしには〉、それらの関係がいかに狂いを生じるものであるかを具体的に示すという姿勢は、これまでの章と同様であるし、〈縦令男女交際にいかなる制度を加ふるとも、いかなる修正を施すとも、その努力は徒労に終わるばかりであ〉るというところに、社会制度と個人との関係が如実に示されているのである。

以下、二十四章から最終章の二十九章までは、〈思想は一つの実行である。私はそれを忘れてはゐない〉〔二十七〕に見られるように、有島自身の態度表明と、このエッセイの背後にある内外の思想家たちへの謝辞、有島の〈僅かばかりな誠実が叫び出した訴へに過ぎない〉という反省などが記されているところである。

三

これまでに述べてきたように、有島の愛の論理をその叙述に従って分析してきたのであるが、個性復帰が本能的生活を、つまり愛を可能にする基本的条件であることを確認することができたことになる。そのためには、第一のエピグラフに示されている絶対的自己肯定性が条件であると同時に、第一輯から第十輯までに付けられたエピグラフが示していたように、絶対的存在による無条件の、無制限の受容が可能である限りにおいて愛はいかなる孤独の状況にも耐えることのできる力であり、さらに、自らの中によい結果を生ぜしむる原動力としての位置づけが、第二のエピグラフによって示されていたということになるのである。

しかし、有島の現実としては、愛実現の不可能性は、現実的にはその過渡期性と未成熟性が問題となるのであるし、本質的には、人間の内面における否定性を、つまり個性復帰の不可能性をふたたび問題にしなければならないという、循環論理の鉄鎖の虜になってしまわなくてはならない者であることを知らなくてはならないのもまた事実なのである。

真実の愛実現を妨げている状況を打破するためには歴史的現実に対する積極的な働きかけ、社会改革の実践が要請されるところであろう。有島の社会主義志向もそのひとつの現れであるにちがいない。しかし、そこで発見したものは、「宣言一つ」において示されている宿命的不可能性、第四階級者になることのできない存在性の発見だったことは周知のことである。このような、自己不可能性の発見にもかかわらず、求めつづけなくてはならないということは、一種の拷問でしかない。この時期の有島のもうひとつの特色である、女性問題に対する発言が多いということも、女性にことよせて果たし得ない望みの達成を志向したものということになるのであろうか。そのエッセンスは、有島の〈poetic woman〉に対する期

待であることはすでに述べたところであるが、[註13] 二十三章の女性問題に対する発言はその一つの顕現だということもできるのである。あえて牽強付会の謗を恐れずに、女性と詩とを結び付けることを試みるならば、詩的女性への憧憬としてそれは有島の第三の憧憬として位置づけられるべきものであることを顕わしているということになるのではないだろうか。

それは一応おくとしても、このように考えてきた場合、有島の詩人に対する期待と言うものが、まさに最後の、背水の陣としての重要な意味をもっていたものであることを伺い知ることができるのである。なぜならば、〈詩人〉であるということは、〈詩人は必ず深い愛の体験者〉だからであり、有島が詩人でありえないと思わなくてはならないのは、〈愛の要求に対する私の感受性が不十分だから〉なのである。

私にもつと鋭敏な感受性があつたなら、私は凡てを捨てゝ詩に走つたであらう。そこには詩人の世界が截然として創り上げられてゐる。私達は殆んど言葉を飛躍してその後ろの実質に這入りこむことが出来る。而してその実質は驚くべく純粋だ。〔二十一〕

というように、すでに詩人とは有島の認識のなかにあっては、愛をその内面に完成させた存在の謂だからである。

四

詩と詩論の考察は、有島のターニング・ポイントともいうべき「惜みなく愛は奪ふ」に至ってようやくその本論にたち至ったように思われる。

有島の詩人への期待の大きいことは、これまでにも有島の表現論の問題として取り上げてきたことであるが、[註14] このエッセイ以後の有島のいわば起死回生の試みを詩人性に託していることを思うときに、このエッセイの眼目がこのところに凝縮されて示されているということができるのではないかと思われる。

すべての行為が、たとえそれが時代や歴史の様相を色濃くおびていたとしても、有島の魂の変革を意図した内部生命改革の手段であったように、有島の生の営みは、〈直接に人類に対して自己を表現せんと〉する〈悶え〉であり、〈彼は彼自身を詩に於て象徴する〉〔「詩への逸脱」大12・4〕者だからにちがいない。

有島の個性復帰願望は、詩人性獲得願望として、その方法を、〈目を挙げて見るもの、それは凡てが神秘である〉〔十七〕と言われている〈神秘〉性において求められなくてはならないという、新たなる進展を見るべき状況にたち至ったということができるのである。[註15]

【註】

1　「マタイ伝」第十九章十九節

2　日本近代文学大系第三十三巻『有島武郎集』昭45・3　さらに補註には〈有島の惜しみなく奪う愛の考え方と、メーテルリンクの『智慧と運命』〉との間には、〈かなり接近した考え方〉があるという興味深い指摘がある。

3 「『或る女』論（五）―後編の葉子―」〔拙著『有島武郎の文学』昭和49・6　桜楓社所収〕

4 山谷省五『基督教の愛について』基督教思想叢書刊行会　昭12・11

5 有島武郎研究―運命観をめぐって―〔註3に同じ〕

6 小玉晃一『比較文学ノート』笠間書院　昭50・1

7 A・ラウス　水落健治訳『キリスト教神秘主義の源流―プラトンからディオニシオスまで―』教文館　昭63・1〕

8 鶴欣也「文学における向こう側」国文学研究資料館共同研究報告4　昭60・4〕

9 宮城音弥『愛と憎しみ』岩波書店　昭38・4〕

10 「『或る女』の定子はイサクか」〔「燔祭」第一号　平1・1〕

11 註二に同じ。

12 安川定男「明治の作家―付「白樺派」」〔『作家の中の音楽』桜楓社　昭51・5〕

13 「『或る女』論（二）―田鶴子と〈poetic woman〉―」〔註3に同じ〕

14 有島武郎研究―「詩への逸脱」をめぐって（一）」～「有島武郎研究―著作集『三部曲』をめぐって―」〔昭50・11～昭60・10〕とくに、「有島武郎研究―著作集『小さき者へ』をめぐって―」〔昭59・11〕

15 「『宣言ひとつ』試論」〔「国文学解釈と鑑賞」平1・2〕

〔追記〕

㈠において指摘した余録についての考察は、すでに紙幅も尽きたので、稿を改めて論じることにしたい。目下のところ、「燔祭」第二号〔平2・3発行予定〕に発表を考えている。